

# 経済学への提議(4)

## ——基礎的諸概念の再検討——

友 岡 学

### 目 次

#### 1. その序章

##### 【1】一つの科学

##### 【2】起源論的命題

##### 【3】悪循環

#### 2. 自然主義と人間主義

##### 【4】時間と空間

##### 【5】個体と類

(以上、鹿児島県立短期大学商経学会「商経論叢」  
11号)

##### 【6】物質と非物質

##### 【7】進化と非進化

(以上、九州大学大学院「経済論究」12号)

#### 3. 労働と生産

##### 【8】ヒトの労働と動物の労働

##### 【9】代謝ということ

(以上、本「紀要」13号)

##### 【10】ヒトの労働のモデル

##### 【11】生産物の概念

##### 【12】労働と生産の諸形態

#### 3. 労働と生産

##### 【10】ヒトの労働のモデル

生物では、労働と生産は「代謝」という言葉でよく表現されているのだが、生物もまた労働し生産する以上、主語としての主体、客語としての客体が想定される。しかし、生物性では主体と客体は未分化的に統一しており主体と同様に客体も個体自身である。手段及び対象も個体自身以外ではない。手段の概念は一応今まで通りでよいとして、対象の概念については一考を要する。しかしあとで取り上げる。手段と言ひ対象と言ひ、更には生産物(成果)と言ひ、人間性における労働と生産で具体的に分化してあらわれるので、生物性では問題にならない。このように、労働と生産が自己回帰的であるのが生物性を特徴づけ、生物は総じてこれに強く規定されている。(1)だから、生物では、自分が満腹する隣りで他者が餓死するのも、当り前のことである。ヒトもまた、生物性(動物性)を免がれない限りで、隣人の貧乏に鴨の味を感じず。徹底した個人(個体)主義がここにある。生物性では個体維持が種属(類)維持に優先する。

(1) アダム・スミスは適切にもつぎのように言う;「他のほとんどあらゆる動物類のぼあいには、おのおのの個体は、それが一度成熟しきると、まったく独立してしまうのであって、その自然の状態では、他の生物の援助をなに一つ必要としない。」『諸国民の富』2章、大内、松川訳岩波文庫、1の118ページ)

蟹は甲羅に合わせて穴を掘ると言われる。より正しくは「自分の甲羅に合わせて」である。この自己回帰性はいわゆる道具の有無に先がけて、生物とヒトとを(厳密には生物性と人間性とを)区別する。(2)蜘蛛は巣を張って補虫する。巣はりっぱな道具である。それは漁師が使う網と機能的に異なるところはない。鳥は巣をかけて住む。それは人家と、保温、防風、防水等々の機能において、いささかも異なりはしない。小鳥の巣は小鳥自身にとって役立つ機能を果せばよいのであって、人にとって幼稚すぎても、小鳥にとっては何ら痛痒を感じるところではない。道具でヒトと動物を区別する人たちは、これら動物の道具について語ろうとしないのが普通である。

(2) ただし、広い意味での手段の存在は、人間性を特

徴づける。広い意味での手段というのは、特定の個体が自分自身のために自分で生産したものではなく、不特定の個体が不特定の諸個体のために生産したものである。そうであるがためには、類的に普遍的な象徴性として手段は規定されねばならぬ。言語、貨幣等々に見られる通りである。そういう意味で道具が考えられるならば、勿論道具でヒトを特徴づけることもできるが、従来は「道具」をそういう意味では用いていない。

マルクスは蜜蜂の巣について語ったが、生産物として語ったのであって、道具としてではない。だが、蜜蜂の巣は、住居であり、貯蔵所であり、産室であり、保育所である、等々。それを道具と見るならば、人間は「道具を作る、あるいは使う」という点で動物と区別される；とする考え方は破産する。それを道具と見ないならば、およそ道具というものはあるまい。だが、それよりも、生物に生物性と非生物性（人間性）という対立的二要因を見出すことが鍵であった。この鍵をもってすれば、生物とヒトとの決定的区別が明らかになろう。さし当りすでに前諸節で説かれたように、生物は生産物を他者のために生産しないが、ヒトはそうではないということで区別するにとどめよう。なぜ、こういう留保をつけるかはつきの言い方のうちに汲みとっていただく外ない。もし生物が、他者のために生産するとすれば、それだけその生物は人間化しているのだ。もしヒトが、自己のために生産するとすれば、それだけそのヒトは生物的であるのだ。(3)

- (3) 若干の説明を示唆的に加えておこう。生産物はどうなものでもよい。道具でも、消費物資でも、言葉でも、発声でも、思想でも、すなわち有形無形を問わない。その生産物が真に外在的であることを検証されるには、単に2人称的な他者だけではなく、その2人称的な他者を介して3人称的な別の他者にまで生産物が役立たせられる必要がある。aは自己の情報をbに伝える。更に、bが、aからの情報を不特定の他者たとえばcに反復的に伝達しえて、はじめてその情報は外在性を検証されるし、a、b、及びcが相互にそういう関係のうちにあるとき、彼らは相互に人間的関係のうちであり、そして、まさにヒトである。生物では、この情報伝達が、時間的な一方的交通（親から子へ、遺伝子を通じて）であるか、それとも、空間的に行なわれても、せいぜい特定2者間で、不特定3者に波及することはない。シンボルとサインの相違である。

このシンボリズムの観点からすれば、道具によってヒトと生物を区別するよりも、言葉によって区別

した方が合理的である。類に普遍的な情報（すなわちその類内では、すべての個体にとって意味あるものであり、客認され合うものである生産物）が一定の経済的形式をとったものが貨幣に外ならぬ。貨幣の使用は、したがって、ヒトであることの証しである。だが、まだ、そこまで行く必要はない。

生物学的代謝概念は、主客の未分化的状態という生物の特徴に由来する。「労働する」は自動詞だが、「生産する」は他動詞である。自分が自分を生産する場合には「生産する」ことの他動詞性は失なわれる。ヒトでは分化している。分化によって、その分だけ、個体は自己同一性を失ない、非個体的になり、生産物は外在化する。生産物は、単に個体の外に、個体から物理学的な意味で離れて存在するだけではなく、その当の主体たる個体から外に出て行く。すなわち、宇宙間衛星が地球の系から外へ飛び出て行って、別の系の内へ入り行くのと同様に、ある主体の系から外へ出て、他の主体の系の内へ入り行くものとして、生産物は存在する。このような状態で、労働と生産の二重性が明らかになる。すなわち、一方で自己の再生産としての内在的生産物の生産（生物的生産）は副次的目的になり、消費という名が与えられ；他方で、外在的生産物の生産（人間的生産）が主要な目的となり、経済学でこれは労働及び生産として概念されるようになる。

消費と生産の同一性はマルクスによって説かれたところである。（『経済学批判』所収「経済学批判への序説」参照）これには若干のコメントが必要である。マルクスは、取り扱いの対象を物質的生産に限定した。（同、287ページ）(4)この物質的生産のうちには、勿論ヒトの（目的格）生産はふくまれていない。ヒトは物質的にとどまらないからである。そうであれば、消費を生産と区別しなくてはならぬし、消費は経済学の範囲から出ざるを得ない。だが、マルクスは、そうではなくて、消費と生産の同一性を強調する余りに、消費概念を勇み足的に拡張している。「生産することにおいて諸能力を発展させる個人は、また生産行為において、その諸能力を支出し消耗する。それはまったく、自然的生殖が生命力の一種の消費であるのと同じことである」（297ページ）と「労働力の支出を「消費」と言うばかりではなく、「生産手段の消費」（297ページ）とも言う。生産と消費の同一性は、すでに説明されているように、生物性の特徴に外ならぬ。ヒトの人間性について語る時には、その同一性ではなく、分化こそが強調されねばならぬ。「生産手段の消費」というのは、あらずもがなの表現である。

- (4)「物質的生産」があれば「非物質的生産」がある。

マルクスが、前者に限ったのは、古典派経済学の伝

統を忠実に受け継いでいることを示す。しかも、物質的生産に経済学を限定することに意識的であったのは、古典派の末流であり・マルクス自身から「俗流」派に組み入れられたマルサスやJ.S.ミルであったのは皮肉である。(マルサス『経済学原理』吉田秀夫訳、岩波文庫、上、第1章;J.S.ミル『経済学原理』末永茂喜訳、岩波文庫、1の44、105、及び106ページ参照)

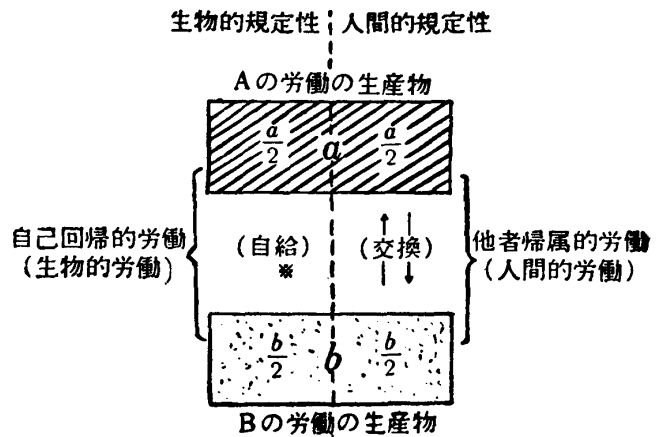
非物質的生産について、マルクスは『剰余価値学説史』で若干説明している(全集8巻 446ページ以下)が、『資本論』では消え去る。ここにも、「価値」を産む産まないの果しない議論の根源があろう。ピアニストは? 歌手は? 牧師は? 教師は? 相撲は? 妻の家庭労働が価値を産むかどうか、ジャーナリストティックな話題になったことがある。今日では、いわゆる第3次産業の比率が増大しているが、物質主義的経済学は、よくこれを抱摂することを得ないだろう。もっとも、私に言わせれば、どんな社会でも、第3次産業は欠かせぬものである。どんな生産物でも、非物質性は免がれない。生産物にシンボリズムを見出し得なければ、その人にとっては、生産物ではない。豚に真珠。

なお、近代経済学といえども、物質主義と無縁というわけではない。(キャナン、マーシャル、パレート、J.B.クラーク。)L.ロビンズは適切にも批判を試みている。物質主義的見解によれば「交換の世界は絶望的にひきさかれるであろう。」(Lionel Robbins; An Essay on the Nature and Significance of Economic Science. 1932, p.6 辻六兵衛訳、10ページ)「このような定義を固執せしめるにいたった諸原因は、主として歴史的な性質のものである。それはフイジオクラットの影響の最後の名残りである。」(p.9 訳14ページ)

生物的規定性では消費がそのまま生産であり、また消費的労働もそのまま生産的労働である。消費するのも労働する一種である。着る、食べる等々。それが自己回帰的である限り、人間的労働ではない。人間的労働となるには、他者に消費させる労働にならねばならぬ。病人に食べさせさせてやる等々の看護的労働は人間的労働である。すなわち、他者を生産するからである。生物で、たとえば親鳥がひなに食餌を食べさせるのは、限定された意味においてであるが、人間的労働である。

以上のように、対立的な二面性をもつヒトの労働と生産を、モデル的に表現するには、2個体をもってするのが便利である。2個体は自己と他者を意味する。もっとも2個体の関係に限定するのは充分でない。がそれは後で

説明されよう。Aの生産物  $a$  は、AとBに消費され、Bの生産物  $b$  も同様である。つまり、ヒトの世界がA、Bという2者によって構成されていると前提される。ここには、交換の原型がある。



※自給は、自己に供給するの意

ここに、 $a/2$ ,  $b/2$ というのは、個体数の逆数であるにすぎぬ。類を構成する個体の数を  $G$  とすれば、 $1/G$  がめいめいの自己回帰的部分であり、 $G-1/G$  がめいめいの他者帰属的部分である。もっとも、現実には、類の空間的分布としての市場の広がり、生産物の種類について必ずしも共通ではない。それは、稿を改めて価値を論ずる際に明らかにされよう。AとBの関係は、交換され合う生産物が空間的にその位置を転換するのに具体化されているように空間的な並存関係である。例を他に求むると親と子という時間的關係ではなく、夫と妻という空間的關係がそれに当る。「家族」は、夫婦と親子の2つの関係によって基本的に構成されるので、一面では人間的な社会であり他面では生物的社会である。夫婦は、それが持続する限り夫婦であるが、親子はいついかなるときでもその関係を失わない。

(4) 拙稿「共同体ということーゲマインシャフトとゲゼルシャフトー」(九州経済学会「経済・経営研究」第1集1963.3)を参照されたい。この対立的な二つの関係は、単に家族の意味を明らかにするばかりではなく、いわゆる社会の構成原理を理解する鍵であると言ってよい。夫と妻の関係はゲゼルシャフト的であり、親と子の関係はゲマインシャフト的である。両関係の対立性は、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行という従来の歴史観に修正をもたらさずにはおかない。

この原型は、制限されたなりに、交換の原理を物語る。第一に、交換し合う諸個体は、それぞれ独自の個(体)性を維持しなければならないこと、である。それは、つまり、それぞれが相異なる労働種類を行なうということ

であり、もっと一般的に言えば、それぞれが独自の系としての時間・空間に存在する、ということである。このことは価値論の特に等価交換についての従来の考え方に訂正をもたらさずにはおかないだろう。等価交換の思想では、相等しいものが交換される、が、交換以前に相等しいということは証明され得ないことである。逆に、交換され合うという事実によって、相等しいことが証明される。幾何学における合同の定理について見ても、そのような顛倒が行なわれている。合同の定義は、もともと両者重ね合わされるものは相等しであった。ところが、その証明の手続きは、逆に、相等しいが故に合同である、となる。絶対的な時間・空間においては、勿論、逆もまた真たり得る。第二に、交換し合う諸個体は、相互依存的に存在する。相互に価値である。(5)この局面において個体性は一般性のうちに溶融する。交換し合ったまさにその点において、諸個体は絶対的な時間・空間のうちに存在する。ワルラス流に言えば、 $1/2a \equiv 1/2b$  ( $a \equiv b$ ) という価格がそこに成立する。価格は、したがって、価値という関係の確証された形式である。あるいはまた、価格は、諸個体がヒトとしてその人間性(相互に価値であること)を、類としての存在性を、相互に確認し合う行為の帰結であるといえる。(6)

(5) 価値概念についての新しい試みは、「価値と市場」(「商経論叢」12号)においてなされる。

(6) 価値について語るには、まだ貨幣を必要としないが、価格の場合には貨幣を抜きにするわけにはゆかぬ。ここでは、価格(という現象)の哲学的意味を交換の原型のうちに見出したに過ぎない。

生産物の外在化は、外在的生産物の生産を労働の直接的かつ主要な目的たらしめる。生産は、もはや、外在的生産物の生産のことであり、内在的生産物としての個体自体の生産は、消費という規定を受け取る。それに対応して、外在的生産物を生産する労働が、生産的労働として労働の主流になり、内在的生産物を生産する労働は消費的労働として労働の末流とみなされる。

生産

{ 外在的生産物の生産 = 労働 = 生産的労働  
{ 内在的生産物の生産 = 消費 = 不生産的労働

労働

{ 生産的労働 = 生産 = 外在的生産物の生産  
{ 不生産的労働 = 消費 = 内在的生産物の生産

生産的労働(及び不生産的労働)の概念は、マルクスのそれと全く異なる。生産的労働に、マルクスは二つの意味を付している。一つは、「単純な労働過程の立場から生ずる」(Das Kapital, Bd. I, s.189, 訳2の335ページ)ものであり、二つは、資本の立場から剰余価値を

うむものという制約をうけるものである(Bd. I, s.534, 訳3の804ページ)。前者は超歴史的であり、後者は特殊歴史的である。この両者の区別は、『資本論』でも、『学説史』で精力的になされている。

「生産の資本主義的形態をその絶対的形態と——従って生産の永久的なる自然形態と——考えるところのブルジョアの偏見固陋のみが、資本の立場から生産的労働であるところの問題を、如何なる労働が一般に生産的であるか、即ち何が一般に生産的労働であるかの問題と混同しうるのである。」(『剰余価値学説史』附録「生産的労働の概念」マル・エン全集8巻429ページ)ところがマルクスの概念は必ずしも整然としていない。「資本家のために剰余価値を生産する労働者、または資本の自己増殖に役立つ労働者のみが生産的である。物質的生産の領域外から一例をあげてもよければ、学校教師は、児童の頭脳を加工するばかりでなく企業者の致富のために自ら苦役する場合に、生産的労働者である。」(Das Kapital, Bd. I, s.534, 訳3の804ページ、原文の傍点は省略。因みに言えば、「一例」を物質的生産の領域外からあげるとは皮肉なことである。(7))あるいは、「生産的労働者自身は私に対して不生産的労働者であり得る。」(『学説史』8の443ページ)「公開のホテルの料理人と給仕は、彼等の労働がホテル所有者のための資本に転化される限り、生産的労働者である。この同じ人々は、私がそれらの労務を以って資本とせずして、収入を支出する限りに於て、下僕として不生産的労働者である。」(同、285ページ)「私」がホテル所有者でなくとも別の企業の資本家であり、そのホテルに業務のことで泊る場合、給仕の労務は生産的なか不生産的なのか?

(7) 物質的生産については註(3)を参照。ただつきのことを付記したい。平瀬己之吉氏は、ロートベルトッスについて評論するなかで、「ロートベルトッスの言う『物質的生産』とは文字通り『物質の生産』ということ」であるが、マルクスの『批判』で言う物質的生産は、「言葉は同じでも意味はまるで違う。マルクスの場合には、それは物質的生産関係(なぜ、これを明快に経済関係と言ってはならないのか?—友岡)ということであり、あるいは生産関係の物質的(なぜ、ここでこういう形容詞を必要とするのか?—友岡)基礎把握ということであった」と無理な説明をしている。(『経済学説全集』河出書房4, 第4章, 223ページ)これはマルクスを弁護しているが如く見えて、むしろ、マルクスの物質的生産概念のあいまいさをさらしている。

それらの混乱は別として、およそ経済学が「不生産的労働」を「生産的労働」と区別する意義は何なのか? 「剰余

価値」を産む労働のみが経済学の対象になるのであれば、そうでない労働を顧慮する必要はない。もっとも、「不生産的労働」が「生産的労働」の存在にとって欠かせぬものであるなら、話は別である。しかし、この場合には「不生産的労働」は「生産的労働」にとっては、「生産的労働」である、という周りくどさのなかに両者を区別する意義は消滅する。(8)

- (8) このことは、「必要労働」と「剰余労働」についても言える。マルクス自身言う：「それ(必要労働)は労働者にとっても(「も」！？－友岡)必要である。けだし、それは、彼の社会的形態には係わりがないからである。それは資本とその世界にとっても必要である。けだし、労働者の絶えざる定在は資本とその世界との基礎だからである。」(Das Kapital Bd. I, s.225, 訳2の384ページ, 傍点は友岡) そう言えば、「剰余労働」も「必要労働」であることになる。けだし、「剰余労働」は資本(家)にとって必要であるのは勿論のこと、資本(家)の絶えざる定在は、〔賃〕労働(者)の世界の基礎だからである。〔賃〕労働(者)あつての資本(家)なら資本(家)あつての〔賃〕労働(者)である。「かんたんに考えても、資本家なしには労働者はありませんし、労働者なしには資本家はありません。」(松村一人『弁証法とはどういうものか』岩波新書, 31ページ, 傍点は友岡) 資本(家)あつての労働(者)であるが故にこそ(剰余労働あつての必要労働であるが故にこそ)、プロレタリアートは資本(家)を打ち倒そうというのではないか？！ 逆に、労働(者)あつての資本(家)(必要労働あつての剰余労働)であるなら、プロレタリアートがまずみずから消滅しなくては資本(家)は消滅しない！？

## 【11】 生産物の概念

これまで生産物は外在的と内在的の区別が与えられていただけであった。この区別自体極めて重要である。生産物が内在的である間は、それが外在的であるときに具体化される主体と客体(生産物、手段及び対象)の関係は、ただ一つに未分化的に統一されており、労働と生産は、諸個体の空間的關係としてではなく、それぞれの個体の自己同一的な活動のうちにに行なわれる。言うまでもなく、世代という表現が与えられているように、関係は時間的である。しかも、子は親になるが、親が子になるわけではないので、不可逆的な関係である。だから、生産物の外在化は、諸個体の関係が時間的なものから空間的なものへ、不可逆的なものから可逆的なものへ転換す

ることを意味する。面白いことに、時間的關係の空間的關係への転換は、生物の世代的生存様式のヒトの無世代的生存様式への転換に相応している。時を選ばずに出産するのはヒトの一特徴である。人口の年齢別構成がどうであれ、1年365日のうち誰かの誕生日でない日はなく、恐らく、誕生日ごとの人々の数は、平均的に分布する傾向をもつであろう。

進化と非進化についてはすでに説明された(〔7〕参照)が、ここで想起したいものである。人類の空間的静的規定での種性は、類内における諸個体の情報(生産物)交換に対応し、時間的動的規定での非種性は、類外的な非共存的関係に対応する。すなわち、ヒトでは、類内では交換し合うが類外では交換し合わない。これに対して、生物の空間的静的規定での非種性は、類内における諸個体の相互的な交換の欠如に対応し、時間的動的規定での種性は、類外での共存的関係に対応する。生物の類内非交換性はすでに明らかである。類外交換性は、個体間の生存競争の方が種間生存競争よりも激しいということのうちに窺われるが、コンラッド・リンボーグ「海底の掃除屋さん－清掃共生を観察する－」(『科学朝日』1962.1)に具体例が見出される。

「生産物」は、その特有の日本語的表現の故にか、また伝統的に、片よって理解されて来たように思える。物質的生産については、すでに論評を加えたが、物質的生産物についても同様のことが言える。重複を避けながらその誤まりを訂正しておこう。

マルクスは『学説史』で非物質的生産の意味に言及している。「非物質的生産に於ては、それが純粋に交換に対して営まれている場合に於ても、従って商品を生産する場合に於ても、二種が可能である。一、それは商品に即ち生産者及び消費者と異なれる独立の形態を有する使用価値に結果する。従って生産と消費の中間に存立し得る。此中間に於て売却し得可き商品として流通し得る。本、絵画、約言すれば演奏する芸術家の芸術の演出と異なれる総ての芸術生産に於けるが如きものである。ここに於ては資本主義的生産はただ極めて制限される程度に於てのみ行なわれ得る。……二、この生産は生産する行為からは分離され得ない、例えば総ての演奏的芸術家、役者、教師、医師、僧侶等々に於けるが如きもの。ここに於ても資本主義的生産方法はただ狭少の範囲に於てのみ行われる。」(全集8の446～447ページ) 資本主義が発達すればする程、マルクスの評価とは逆になる。(9)だからマルクスの的に考えれば、「全然無視しておいてもいい位に重要でない」(同447ページ) どころか、ますます重視しなくてはならぬ。だが、ある時は小範囲だから無視して良く、ある時は広範囲だから無視してはな

らぬ、というものではなからう。極く一般的に考えて、物質的生産でない非物質的生産、非物質的生産でない物質的生産はなからうからである。マルクスが二に分類している非物質的生産も、生産者から「独立の形態を有する使用価値」を、例えば演奏を聞くヒト自体において生産している。

- (9) この言い方は正確ではあるまい。マルクスの考え方に従って言ったまでである。というのは、第一に資本主義以前において、マルクスによって非物質的生産に含ませられたような生産は、その社会的性格を明らかにする上に無視できない重要性をもっていたであろう、からである。武士、僧侶、等々。第二に、近時のいわゆる第3次産業の増大(特にまた官僚機構の拡大)もさることながら、いわゆる自由資本主義の合言葉「安価な政府」のスローガンは、まさに安価でないが故の要求であったろうからである。私が言わんとするところは、どんな社会であれ、非物質的生産(そういう概念が許されるとして)は不可欠である、ということこれである。

両者の区別は本来伝統的に富の定義に関わるものであった。マルサスの『経済学原理』の「第1章富の定義及び生産的労働について」を読めば、富が「物質的生産物」に限定されてゆく経緯が大体分る。要するに、第一：蓄積されるもの、第二：計量されるものが富を定義する眼目にされており、非物質的生産物はそれらの条件を満足しないものとして排除される。マルクスとマルサスが結果において一致しているのは真に皮肉である。J.S.ミルは、結論的には物質派に組する(『経済学原理』岩波文庫1の106ページ)ものの、若干の足踏みを見せて、両者の区別の問題は「重要性に乏しいものである」(1の44ページ)と留保している。

非物質的生産(物)の概念は、マルクスによって「俗流」経済学の祖とさえ評せられているJ.B.セイによって発展せしめられたものである。(山口茂『セイ経済学』春秋社97~98ページ)ただし、セイは、むしろ、両者の区別の経済学的無意味さをこそ本意としたように思える。産湯ととも赤児をも流す愚を避けねばならないのは、「俗流」という名とともにそのなかに潜んでいる正しさの芽をも摘みとってしまってはならぬことと同様である。むしろ、角をためて牛を殺そう。牛とは、勿論、セイの価値概念や生産概念等々、さし当り私にとって不用の大系である。因みにセイに従うものは、トゥック、マカロック、シニア等である。

蓄積という点では、もしそれを小麦や土の堆積をつくるようなことを意味させるなら、「物質的生産物」と

っても経済学的には大して意味をもたない。物理学的な蓄積だからである。だからこそ私たちは、ふだん、知識の「蓄積」と言って決して怪しみもしないのである。計量という点では、「物質的生産物」がいかにか計量されているかを考えればよい。鉄5トン、服10着等々の計量は決して経済学的計量ではない。それで済むなら、価格の存在理由はない。非物質的生産物を価格で「計量」するのは不都合だというのであろうか!?マルサスにとって非物質的生産(物)を不用ならしめたものは、しかしながら、近代経済学においても残存している。ただその理由は、マルクスのなものである。曰く「それは大して重要でない」と。マルクスの非物質的生産(物)を排除しなければならないのは、労働価値論自体の制約された妥当性をみずから宣明することである。

両者の区別が無意味だから、非物質的生産(物)は、表から追い出されながら、裏からこっそりしのび込まれざるを得ない。その良い例は、「労働力の価値」に見られる。「労働力の価値」は、当然教育、教養、娯楽、文化等々のまさに物理的に蓄積も計量もされ得ない諸概念と切り離せない。教育が「労働力」の生産に不可欠だと言われながら(教育、学習というのは、すぐれて人間的概念である)、教育労働は「物質的生産物」「物質的富」「財貨」を生産しないが故に、経済学の範囲から追い出されていた。教師は労働者か否か——という奇妙な問題を、経済学者は奇妙だと感じてさえいない。さらに労働に関して熟練の度合いに応じて簡単労働と複雑労働の区別が行なわれている。(10)「熟練」を物質的なものというには、大胆なこじつけを要する。熟練は、特定の労働種類について言える点で、万能性でも一般性でもない。だから、大工の仕事に熟練である者を左官の仕事に向けることはない。熟練ということでは、左官のそれと大工のそれとは全く対等である。それはちょうど、異なった競技種類の世界記録樹立者あるいは優勝者が金メダルで対等に評価されるのと同様である。熟練不熟練の相違は、ただ同一労働種類についてのみ意味がある。それが、金メダル銀メダル等々として表現される。しかし、熟練が物質的生産物だといえるものではないにしても、学習等による生産物であることは疑いない。そこに、賃銀支払原則が——勿論それは具体的な市場によって修正されるが——示唆されているのを知ることができる。すなわち、異なった労働種類については時間賃金、同一労働種類については空間賃金(個数賃金、出来高賃金)、これである。

- (10) 簡単労働と複雑労働を区別しながら、マルクスは簡単労働を社会的平均労働と言い、複雑労働はこれに還元される、と言う。「平均」と「還元」とは両

立しない概念である。「平均」というときには、簡単労働と複雑労働の中位にある労働が考えらるべきであり、「還元」というときには、簡単労働は平均的位置を失ない、「単位的労働」として考えられる。

この論理的矛盾は今まで気づかれてはいないようである。

意識と言語の関係は、モーリス・コンフォースが「言語なしの観念とは、身体なしの精神と同じように実際には存在しないものである」（『認識論』上85ページ）と言うように、精神と身体の関係に擬せられるものではなからう。むしろ、生産物と手段の関係であらう。意識は言語とちがって、文句なしに、社会的存在によって規定される；というのが唯物論的見解である。その当否は今別として、言語が意識の伝達手段であることについては意見の一致を見ても、それが「上部構造」か「下部構造」というあやしげな論議の種になるのは避けられなかった。スターリンによって、言語は「上部構造」の一部ではない、と判定されて、決着はついたかに見えるが、スターリンは、「下部構造」の一部である、と言っているわけではない。（上と下に両断して、上に含まれていなければ下に含まれるべきなのに。）「文化は社会の発展のあたらしい時期がくるごとにその内容が変化する。ところが言語はいくつかの時期を通じて、あたらしい文化にもふるい文化にも同じように奉仕しながら、基本的には同じ言語のままでいる。」（スターリン『言語学にかんするマルクス主義』国民文庫 160ページ）言語の不変性について語ることができるなら、同様に、意識の不変性について語ることができる。不変的な言語で可変的な思考が表現されるのは、不変的な手段で異なった生産物が生産されるのと同様である。言語は不変でもあり、可変でもある。不変であるのは、たとえば、機械が資本主義における主要な手段であるとはいえ、ハンマーが手段たり得ないわけでないのと同様である。可変であるのはハンマーが機械にとって代られるのと同様である。

言語が意識の伝達手段であることには同意できても、思考の手段でもあると言わなければ批判されよう。だが思考するとはどういうことか？思考するという労働はあらゆる労働がそうであるように、その何らかの成果（生産物）が外在化され、客観的に確認されてはじめて現実的な労働である。だから、伝達されない思考というのは作用のない力というのと同様に無内容な表現である。無言ほど不気味なものはないし、作用（手応え）のない状態ほど恐ろしいものはない。思考する労働は、その成果を伝達する労働によって客観化され人間的労働となる。

ポール・ショジャールは、「思考の道具」としての言語を内言語と称し、「人間だけがこの『内言語』をもっ

ているのである。内言語はもはや言語ではない。なぜなら発音されない（伝達されない、と読んでよい。友岡）からである」（『言語と思考』クセジュ文庫、32ページ、傍点は友岡）と言う。この見解は、肯定的に評価される一面と、否定される一面をあわせ持つ。肯定的であるのはショジャールが、まさしく、外在的な生産物が、人間的な意味で生産物であるのと同じ様に、外言語こそが人間的には言語である、ことを主張している点である。否定的であるのは、第一に内言語が言語でないというのは、内在的な生産物が生産物でないのと同様に背理である点である。（この言い方は、例えば、使用価値は価値でない、という従来の背理的思考にも妥当する。）否定的である第二は、内言語がもしあるとすれば、内在的な生産物が生物的生産の結果であるのと同様に、生物的言語ではあっても、決して「人間」の、また「人間だけ」の言語ではあるまい、という点である。自己に即して言えば、確かに、人は他者に伝達しない思考をすると想定することができる。しかし、人が、誰にも伝達しない思考をしているということ、そのことが伝達されもしないならば内言語そのものの実在は確認されはしない。だからこそ人々は、ふくろうに瞑想する哲学者を見出したりもするのである。それとも、ショジャールは、他者が内言語で思考しているか否か、外言語によらずに確認できるのであろうか？

意識や観念の伝達自体のうちに思考は包含される。それは、交換自体が一つの労働であるのと同様である。この限りでは、唯物論者の言うように、言語なしの思考はない。言語の一般的通用性によって、思考は類的に確認される。だが、唯物論者が「ただ観念論者だけが……言語なしの思惟について語りうる」（スターリン「言語学の若干の問題について」『弁証法的唯物論と史的唯物論』国民文庫、180ページ）というけれども、たとえ観念論者がそう語っているにしても、語っていること自体全く誤まっているわけではない。確かに「言語なしの思惟」論はある。小林智賀平氏は言う；「まず一般的に言えば、思想は言語よりも先行するから、言語があるため思想ができるのではなく、言語はただ思想の喚起を助ける役しか果たさない、ということになる。この考え方は、言語があるから思想がきでる、という説が言語社会学の一部にあるが、これに対立した論である。言語の性格上、この両面が含まれているわけで、既に把握した心の内容に対して、ことばの音声を結びつける一方、またことばを使うようになれば、思考もますます明確になり、思想も一層精密になってくる。」（『言語学初歩』創元選集19ページ、傍点は友岡）言語なしの思考というのは、シンボリズムの一般的通用性に矛盾する。その思考は、ショシ

ヤールが言う内言語なしの思考、というのと異なる。言語なしの思考というのは、非類的な思考であり、内在的思考である。

カッシーラーは言う；「私は同じ意味をさまざまな言語で表現することが可能である。そして一つの言語の範囲内においてさえも、ある思考または観念を、全く異なった言語で表現することが可能である。」（『人間』岩波現代叢書49ページ）同一言語で異なった思考を表現するのは、同一手段で異なった生産物を生産するのと同様である。ここに言語は不変でも意識が可変であり得る理由がある。独創的思想はこうして産み出される。「価値」という言語は同一でも、マルクスのそれとメンガーのそれとは異なる。逆に、意識が不変でも言語が可変であり得るのは、異なった言語で同一の思想が表現され得ることに示されている。それは異なった手段で同一の生産物が生産されるのと同様である。

「言語なしの思考」も「言語あつての思考」も、要するに、両方とも一面的に正しく、一面的に正しくない。これは主として「言語」の定義に関わる。しかも、この定義自体が、その両方を妥当たらしめる要因をふくんでいる。先きほど私は言語と意識の関係は手段と生産物の関係だと述べた。言語の定義は、したがって、手段の定義に対応する。手段を通常の「労働手段」あるいは「道具」に解するときには、労働手段（道具）なしの労働はあり得るということで、「言語なしの思考」もあり得る。だが、手段を広く解するときには、「言語あつての思考」が正しくなる。

この理解は重要である。手段は、従来、経済学用語としては余りにも狭く（またあいまいに）考えられていた。生産手段と労働手段の区別及びその分類のあいまいさは各種の教科書について見れば明白である。労働価値論にとって致命的なのは、「過去の労働の生産物でない」「生産手段（労働対象）」を「生産手段」のなかに含めざるを得ないことである。労働の生産物ではないのだからそれは「価値をもたない」、したがって、「価値法則」の外に出る。土地が、その最も重要なものだが、土地を生産手段とすること最も必要としたいわゆる封建社会の経済は、かくして、「価値法則外的」に、あるいは「経済外的強制」論によって説明されることになる。（拙稿「封建的土地所有の論理」九州大学「経済学研究」24の2、「封建の地代性の非地代性」九州大学大学院「経済論究」9を参照）論理的な矛盾は、すでに引用したところだが（〔8〕）、山本二三丸氏がマルクスによって、「人間はいわば全自然を再生産する」ということのうちに端的に示される。矛盾をまぬがれるには、土地は全「自然」に含まれない、としなければならぬ。近代経済学も、自

由財と経済財の区別において、類似の欠陥を内包している。経済学のタームにおいての世界では、自由財と経済財の区別などは無意味であり、いうならば財だけで結構であり、財はすべて生産物である。労働価値論は、労働の生産物でない生産手段をかかえ込むことによって自ら制限された理論であることを示しているが、労働の徹底的な普遍化によって「労働価値論」そのものに内在的な論理的矛盾が明らかにされるとは、真に皮肉である。

「労働手段」「道具」の有無によってヒトが定義され得ないことはすでに見たところである。しかし、もしヒトが相互に手段化されている意味で（広い意味で）、手段なしのヒトはない、というなら、それは正しく、したがって、手段の有無によってヒトを定義できる。言語がまさにそのような意味での手段であり、外在化された生産物である、とすれば、言語なしの思考はない。しかし内在的生产物も生産物であることによって、内言語も言語であり、この意味のもとでは、生物もまた言語をもち言語なしの思考もあり得る。すなわち、「言語あつての思考」論は、外言語あつての人間の思考（ヒトの思考の一面）及び内言語あつての生物的思考（ヒトの思考の他の一面）という点では正しいが、内言語なしの人間の思考及び外言語なしの生物的思考もあり得る点を否定することで正しくなく、「言語なしの思考」論は、ちょうど逆に、前者が正しい点で正しくなく、正しくない点で正しい。

生産物は、外在化されていることで、客体であるが、生物学的物理学的な意味での代謝における外界ではない。むしろ、生物学的物理学的な外界がヒトの系内に引き入れられることによって情報化されたものであり、系に即して秩序正しさを与えられたものである。秩序正しさとはある系の主体たるヒト向きに利用できるものとして存在する状態である。生物では、情報化されたこの生産物は、内在的なものとして、個々の個体自体に蓄積されるが、ヒトでは、これが外在的なものとして、個体から、生物学的物理学的な意味で離れて、蓄積され、交流し合わされる。交流し合う場合は、諸個体がそれを構成しながらそれに含まれるひろがり（空間）としての市場であり、このひろがりにはさし当り（厳密に言えば、人間的には）何の制約もない。ひろがりの無制約性という人間の性質は生物が一般に（厳密に言えば生物的規定性では）、特定の種において特定の空間的領域（いわゆる環境）に制約されてのみ存在する性質と相反的である。

市場は、経済学的には、「自然経済」に対立せしめられている「交換経済」の場として通常考えられている。そのこと自体、誤っていないが、「自然経済」を独立する経済だとするときには誤まる。「自然経済」の神話



は、マルクス経済学によっても捨てられていない。捨てられないのは、一面の正しさを持つからである。(この稿に実際に連続する「価値と市場」「商経論叢」12号を参照。)生物性は個体的に自然経済であるが、人間性は類的に自然経済である。しかし、生物性は、類的には(類間的には)交換経済であり、人間性は個体的に交換経済である。レーニンが言う国境を越えてゆく商品流通(『ロシアにおける資本主義の発展』岩波文庫上、64ページ)は、何も資本主義に特有のものではないし、「世界のすべての国を単一の経済的全体へと結合する」(66ページ)のは資本主義に特有の論理的必然でもなく、ヒトの人間の本質なのである。レーニンがそこで言う「世界」は地理学的な世界であることに注意されたい。ヒトは人間的にはつねに世界的存在である。類の中に類を形成し、その二次的な類を個体的に閉鎖するのは(そこに自然経済神話の根拠があるのだが)、生物的進化に見合うヒトの生物的本質である。ヒトは生物的にはつねに孤立的存在である。人間性は、類内における諸個体の平和的共存をその特徴とし、生物性は、類内における諸個体の敵対的斗争をその特徴とする。ヒトの人間的な単一類性に背反する類間の斗争は、生物的な(類を個体として閉鎖する)個体間斗争の反映である。

情報、秩序正しさ、客体化された主体性、としての生産物は、ヒトがそうであるように、素粒子的である。その存在は、ひろがりとしての場に、確率的のみ把握される。ひとつひとつは個体的(粒子的)であるが、それが辿って来た経路は全く非個体的(波動的)である。経路を確かめるときにはその位置が、位置を確かめるときにはその経路が不確定であるという不確定性原理はここにも妥当する。労働価値論は、不確定なものを確定されたものとして見なす。不確定をも許容するのではなくてはならぬ。労働価値論は、第一に、「価値」の源泉が労働であるということ、第二に、その「価値」を計るに労働時間をもってするという点にある。この特に第二に関して、労働価値論は、堀江忠男氏がどのように言うのを妨げることはできない。「『過去』の労働は、『過去の程度』のそれぞれ異なった・無数の関係労働の、さまざまな分量の総計である。これを『日々の経験で直接』に『時間』という単位で計ることができるはずがない。…それが可能な場合は、高次の共産主義社会ではなく、むしろ『サルが樹からおりた』ばかりの人間集団だろう。」(「抽象の人間労働と『価値』概念の再検討」「早稲田政経雑誌」No. 159, 8ページ)労働時間に価値の尺度を求めるために、いわゆる「生産手段」(過去の労働の生産物)を排除して行き、道具をもたない(生きた労働ばかりする)ヒトを窮極の労働価値説的理想として描くと

いうのは余りにも自家撞着的すぎる。なぜなら、労働手段こそ、「人間」の証しであったからである。労働時間に価値の尺度を求めるのは、技術的に無理であるばかりではなく、原理的にも妥当でない。時間の相対性についてはすでに説明されたところである。(〔4〕時間と空間)異なった諸系は異なった時間を経験しているばかりではなく、異なった空間のうちに存在する。生きた労働は、現在の労働だから、マルクスが価値を規定して他方で言う「社会的平均」もそれなりの意味を持ち得るとされても過去の労働時間が現在の時点で「社会的平均」化される何らの理由も説明されてはいない。むしろ、「過去の労働」という表現自体が、絶対的な時間を意味するので、過去の時間はあくまで過去の時間であって、現在の時間と比較されるものではあり得ない。比較されるものとすればある系にとっての過去は他の系にとっての現在でもあるという相対的な時間をもってしなければならず、そして、それをもってすれば、労働手段を一般的に過去の労働とするわけにはゆかない。絶対的時間によって価値を尺度づけるとすれば(またできるなら)、価値はそのまま時間をもって計られればいいのであって、何も貨幣によって価格として表現される理由はない。価値が価格として表現されなければならないこと、そのことこそ、時間空間の相対性に由来するのである。

価格は、時間、空間の相対性及び絶対性の対立の解決形式である。その絶えざる変動は、価値(という関係)にある諸系の相異なる時間空間的運動を表現し、一物一価の原則は、(II)諸系が交換において相会するまさにその点における時間空間の絶対性(静止する系)を表現する。従来 of the 言い方に従えば、価値(労働時間)が等しいから交換されるのではなく、交換されたから価値が等しいのである。

#### (II) 一物一価の原則 Law of one thing one price

をつぎのように言うのは正確ではあるまい。「市場において見れば、どこへ行っても、同一種の商品には同一の正札がついているということである。」(大内兵衛『経済学』岩波全書 104ページ)市場は広がりをもつし、広がりをもてば当然諸商品はそれぞれその位置と時に応じた価格をもつ。また、つけられた正札の価格は、最終的な価格(実現された価格)ではなく、あくまで、売手の主観的・予想価格であるにすぎない。買手は別の価格を自己に即して要求して然るべきであり(それは、買手もまた存在する時間空間をそれぞれ異にするからである)、両者合意に達するところに、最終的価格が当の商品についてつくのである。したがって、同一種商品ではあっても、個々の商品価格は異なる。(正札は、平均的

である。)一物 (one thing) 一価の原則であって、決して、同一種商品一価の原則ではない。

## 【12】 労働と生産の形態

資本主義は、労働者と資本家の対立を特徴としている。両者別個の人格である。資本家という、古典派経済学時代の所有者＝経営者の概念は、株式会社の発達によって最近ではそのまま受け継がれ得ないものになった。ここでは、それには立ち入らない。他方、生産者という概念がある。従来、労働と生産の概念が不明確であったのが災いして、生産者というのは、あるときには労働者を、あるときには資本家を意味する混乱が避けられなかった。この混乱を避けるために、すでに語られた労働と生産についての新しい考え方に従って、つぎのように規定したい。労働者は、外在的生産物を生産する（生産的労働をする）者であり、生産者は、内在的生産物を生産する（消費的労働をする）者である。だから、内在的生産物を生産する意味では労働者も生産者たり得るし、消費的労働をする意味では生産者も労働者たり得る。だが、これでは、先に進めない。先に進むために、不生産的労働（消費的労働）のヒトにおける表現として、生産をば生産物に対する同化（Aneignung）と共通する意味で、生産物に対する支配＝所有において理解しよう。所有するという意味では、したがって、資本家も労働をする。

かくて、労働と生産は、代謝の対立し合う契機に対応する。すなわち、労働は、異化（Entäuserung）に生産は同化（Aneignung）に対応する。あるいは、別の表現を借用すれば、労働は産出（out-put）に、生産は投入（in-put）に対応する。（経営に即して言えば投入という表現よりも収入という表現の方がふさわしい）異化は疎外（Entfremdung）に通じ、同化は所有に通ずる。ここに、従来の疎外論が誤っている点を解く鍵があるが、今は立ち入らないでおく。

労働と生産のこのような意味的分化は、労働と生産の主体の個体間の分化に対応する。生物的規定性は、交換の欠如によって特徴づけられたが、同化と異化の同時空的進行を行なう。主語は、同化と異化について同一である。したがって、非人称的に表現されても誤ることはない。分化が行なわれるときには、労働と生産の主体間の関係を非人称的に（没主体的に）表現すると、論理に混乱が起る。これこそ、従来の労働及び生産概念の非論理的混乱の原因であった。（同種の混乱が唯物論者の「物質」概念にも起っているのは、【6】物質と非物質で見られた。）

非人称的に表現される場合、労働と生産は部分と類の

概念のもとに、「労働は生産（の部分）であるが、生産は労働とは限らない」ということはなる。労働と生産をもって熟語化された「労働手段」と「生産手段」、「労働力」と「生産力」、「労働過程」と「生産過程」等々の場合についても同様である。

さて、労働と生産の関係は、その分化によって、資本主義で最も具体化されており、そこでは人称なしに両者が表現され得ないのを知った。自己及び他者という人称が必要である。「労働は生産である」という非人称的表現は、「（自己の）労働は（自己の）生産である」ことと、それは逆の「（自己の）労働は（他者の）生産である」こととを、同時に意味する。また、「（自己の）労働は（自己の）生産である」ことと、否定的表現の「（自己の）労働は（他者の）生産でない」こととを同時に意味し得る。同様に、「（自己の）労働は（他者の）生産である」は、「（自己の）労働は（自己の）生産でない」ことでもある。だから、非人称的には、「労働は生産である」と同時に「労働は生産でない」と言うことが妨げられない。

労働と生産の主体が個体的に分化しているとき、両個体を労働主体と生産主体と名づけよう。そこで、「労働主体は生産主体でない」と、その逆「生産主体は労働主体でない」という資本主義的命題は、それぞれの否定命題「労働主体は生産主体である」「生産主体は労働主体である」を予想させる。この4つの命題を、〔労働主体→生産主体〕〔生産主体→労働主体〕の形式で並べると、4通りある。

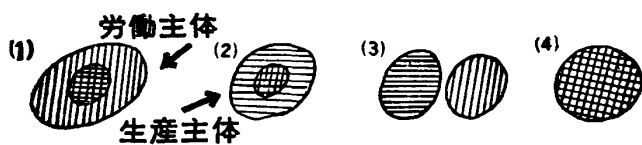
**第1形態：**労働主体は生産主体でないが、生産主体は労働主体である。（ある人は労働主体であるとき、同時に生産主体でないが、別の人は生産主体であるときは同時に労働主体である。）

**第2形態：**労働主体は生産主体であり、生産主体は労働主体でない。（ある人は労働主体であるとき、同時に生産主体であるが、別の人は生産主体であっても労働主体でない。）

**第3形態：**労働主体は生産主体でなく、生産主体は労働主体でない。（ある人は労働主体であるとき、同時に生産主体でなく、別の人は生産主体であるとき同時に労働主体でない。）

**第4形態：**労働主体は生産主体であり、生産主体は労働主体である。（ある人は労働主体であるとき、同時に生産主体であり、別の人も生産主体であるとき同時に生産主体である。）

これを図示すれば、――



第1形態は、ヒトの集合の全部の個体は労働主体であるが、その部分集合の個体が同時に生産主体である状態である。いわゆる「原始共産制」にふさしい表現を見出すであろう。「原始共産制」という歴史的な社会時代は、今のところ、推測の域を出ない。それが、正に字義通りの共産制であったかどうかは分明ではない。共同体の社会であったであろうことは了解され得る。しかし、共同体が共産制をその組織原理としなければならぬ理由も見出されない。私には、「原始共産制」というよりも、むしろ、氏族制といった方が正しいように思える。（その点に関しては、前掲拙稿「封建的土地所有の論理」参照。）他の諸条件を捨象すれば、徒弟をもつ職人親方の形態が、微視的な例を提供する。親方は徒弟とともに労働するが、親方のみが、生産主体として、その労働の生産物を所有する。この種の形態が、特に零細あるいは中小企業として現今にも広汎に存在することは注意すべきである。

第2形態は、ヒトの集合の全部の個体が生産主体であるが、部分集合の個体のみが同時に労働主体である状態である。これは、いわゆる「封建制」にふさわしい時代社会的表現を見出す。周知のように、封建制は領主的階層と農民（農奴）的階層とから基本的に成り立つとされるが、領主的階層は労働主体でない生産主体として、生産的労働をすることなしに、農民的階層の労働主体としての生産的労働の生産物を、農民的階層とともに所有する。勿論、領主的階層は、戦うあるいは祈るという労働をする。しかし、その労働は、外在する生産物を同化＝所有する労働であって、非生産的労働である。封建社会が本質的に軍事社会であり領主は武器をもってのみ紛争を解決した；とはセーの言である。（高橋幸八郎『近代社会成立史論』38ページより）が、領主が生産主体であっても労働主体でないのに対応して、武器は生産手段ではあっても決して労働手段ではない。というのは、生産主体が個体的に労働主体から分化する（労働主体がヒトから疎外される）状態でのみ武器は存在理由をもち、両主体が個体において未分化的に統一される状態では、武器もまた消滅するだろうことを予告する。

第3形態は、ヒトの集合が交わりのないふたつの労働

主体と生産主体の部分集合に分れている状態である。資本主義に最もふさわしい時代社会的表現を見出すことは言うまでもなからう。すべての個体が、ヒトの規定性の他の半面を疎外されている。労働主体のみの諸個体は、ヒトの生物学的（動物的）規定性を疎外されており（従来、人間性が疎外されていると理解されているが、これは全く顛倒している）、生産主体のみの諸個体は、ヒトの人間規定性を疎外されている。（したがって、資本家も疎外されているわけではない。）このような理解の仕方は、現代的企業に見られる経営者の性質に関して一つの解答を与えるであろう。経営的労働をすることによって経営者がその生産物を支配・所有するならば、彼は生産主体として資本家でもあるが、そうでなければ、労働主体にとどまる。経営的労働は、原理的には、盆踊りの音頭取りやオーケストラの指揮者等とは異ならない。

第4形態は、ヒトの集合の全個体が、それぞれ労働主体であると同時に生産主体でもある状態である。想定されている共産主義に最もふさわしい時代社会的表現を見出すであろう。一見するところ、すべての個体が、労働主体と生産主体を兼ね備えているので、その点からすればヒトであるというよりも生物（動物）であるというのがふさわしいように思われよう。確かにそうであるが、同時に、諸個体が相互的な諸関係のもとにおいて存在すること、ここで集合としてとらえられた類において存在すること、その点において、最もヒトたるにふさわしいのである。つまり、この形態において、ヒトは、個体自体においても、また、類においても、人間性と自然性（生物性・動物性）の両規定性を満足するのであり、以前の疎外された状態を回復するのである。ここで、若き日のマルクスの素晴らしい直観的洞察を引用するのがふさわしいであろう。「共産主義は、完成された自然主義＝人間主義としてあり、完成された人間主義＝自然主義としてある。」（マル・エン選集補4、341ページ）

資本主義以前の時代社会を資本主義と同様に階級社会として、さらにそれ以前の無階級社会（原始共産制）と区別して段階づけるのは、疑わしいであろう。私は、その点については、奴隷制を一つの時代社会を特徴づけるものとする従来の歴史観に対する反論をもふくめて、前掲の諸論稿で説明して来た。これらは歴史学の分野に属するので、深入りはしないでおこう。要約的に、以上の考え方から当然引き出されるいくつかの諸論点を述べておく。(a)「原始共産制」は、「自然経済」が神話

的であるように、なお神話の領域から脱してはいない。特に、例えばソ連の『経済学教科書』に典型的に見られるように、「生産力」という概念が無原則的に利用される。「原始共産制」の共産制はその原因を生産力の低い水準に、将来に想定されている共産主義の共産制は、「生産力」の高い水準に帰せられる、という具合である。(b) 将来に想定される共産主義の「共産」の意味については、所有概念の今いっそうの検討を要する。所有は、私の考えでは、生物的規定性であるが、所有そのものが悪であるわけではない。資本主義が私有財産を基本にするとは言うものの、その所有から排除された人々が存在しているという事実からすれば、その言い方は十分と言えない。(c) 労働と生産の諸形態は、相互に移行し得るものであり、それぞれの歴史時代に特定の形態を固定させて考える必要はない。そういう一般的な考え方に従うまでもなく、現実の「資本主義社会」内部に、第4形態の存在する余地があり得ることは容易に理解できる。すなわち、「共産主義」と「資本主義」は、案外融通のきくものである。その融通がどこにどのようにきくかは、歴史学・経済学の今後の課題である。(d) マルクス主義的疎外論がふくむ論理的矛盾は折にふれて指摘されたが、資本主義において疎外が完成されるという点は首肯できる。しかし、第1、第2形態にも、前者には生産主体を、後者には労働主体を疎外されている部分集団があるのを見逃すことはできない。

代謝は生物学的概念であるが、同化と異化におけるエネルギー交換は、シュレディンガーが言うように、エネルギー保存則以上には出ていない。だから、ここにエントロピーが導入される。けれども、個体の生物学の範囲を越えなかった。個体を一つの系と見ることから、類(種)を、さらに生物界を一つの系と見ることへ進む必要が出て来る。生態学がかくて登場する。類内に、制約されたなりに一その制約のされ方が問題なのだが「社会」が認められた。だが、その制約の分だけの社会性が、裏返されて類間に反映しているかも知れない。

個体は外界の一切に対して開放されているにしても、その外界が一義的なものでないことも明らかである。他の種の個体に全く依存せず、無生物界に開放されている生物についてのみ、個体の外界への開放は一義的に考察される。多くの生物は、その生産のために他の種の生物に依存する。だから、個体的にばかりではなく、類的に、さらに生物界全体として、負のエントロピーを吸収している。生物における種属維持に対する個体維持の優先は、同一類については言えても、異なった類については言えない。なぜなら、個体維持にあたっては、同一種の他の個体の存在は必要な条件ではないが、食物の対象

としての他の種の存在は必要な条件だからである。つまり、あるライオンは、他のライオンはいなくとも生存できるが、兎がいなければ生存できない。だから、空間的な関係という意味で社会を見るならば、ライオンは、ライオン同志で社会を形成するのではなく、兎と社会を形成することになる。勿論、こうは言っても、兎はライオンから食べられても、ライオンを食べるわけではないので、その空間的關係は相互依存性・相互移行性に欠ける。また、ライオン同志に社会を否定するのは、生態学のメリットを否定することになる。この矛盾を解決するには、社会を時間的關係と空間的關係の両方が満足されるものと考え、時間的關係という社会の半面は類内に、空間的關係という社会の半面は類間に、それぞれ相補的に存在すると考える外ない。その場合、類間の関係としてライオンと兎の関係だけをとり上げるわけにはいかないのは明日である。総体としての生物の種間の関係である。このように理解すると、生物のある種が、その類内に欠けている空間的關係を獲得すればする程、類内の社会が規定性を満足するものとして現われ、それに逆比例的に類間の空間的關係を夫ない行くことになる。その種こそ、ホモ・サピエンスとしての人類であったのだろう。食物連鎖(類間関係)の頂点に立つわけだが、勿論、それを超越するのは、経済学的な意味であり、生物学的な意味ではない。

経済学的には、ホモ・サピエンスはホモ・エコノミクスとして、単一類において世界を構成する。自然を外的世界と見なすのは、いわゆる自然科学的方法ではあっても、社会科学としての経済学的方法ではない。経済学的には、自然はヒトの主体性が客体化されたものに外ならず、外的世界というよりも、むしろ一そう言いたいなら一内的世界である。(より正しくは、内も外もない、つまり境界のない世界であり、有限であると同時に無限の世界である。それに対応して、宇宙も有限であり、かつ無限である。)

ヒト及び生物を、生物的規定性及び人間的規定性の二重性において把握することが第1であった。二重性把握は、マルクスの労働及び商品についての思考に由来する。その意味ではマルクス的であるが、内容に関して非マルクス的である。第2に、両規定性は、個体及び類について相反的である。第3に、ヒトと生物では、時間と空間が転換的に対立している。その一例では、生物では総じて(生物的規定性のゆえに)時間的系列が空間的に(地理学的な分布として)表象されるが、逆に、ヒトでは(主としてその人間的規定性のゆえに)、空間的關係が時間的系列として(歴史として)表象される。別の例では、総じて生物の情報の類間的な空間的移行は時間的

な移行（遺伝）に転化するが、ヒトの個体的に時間的に生産された情報は、類的に空間的に相互に移行し合うものに転化する。第4に、両規定性は無生物にも適用されるであろうし、ヒトの世界は、生物の世界の裏返された世界であり、無生物の世界に回帰しているであろう。第5に、ヒトと生物、生物と無生物とは、相互に反世界的である。

反世界と言えば、反対粒子の発見によって、反宇宙の存在が語られていることは興味深い、反宇宙が宇宙と接触すると、宇宙は（同時に反宇宙も）瞬時にして消滅する！？（菊地正士『原子核の世界』岩波新書参照）この悲観論は、ただ、そういう事象が生起する確率のとりに足りない小ささに、僅かの慰めを見出しているのだが、その根拠とする所は、陽電子と陰電子との接触による物

質の消滅である。それが、「粒子と反対粒子という関係は、非常に一般的なことであると考えるのが妥当であると思われる」（同、35ページ）ときに、悲観論が生れる。だが、奇妙なことに（というのは、事実の奇妙さではなく、論理の奇妙さを意味する）、この宇宙に反宇宙の粒子が存在している！接触はある確率のうちに起るであろう、ではなく、現実に行なわれている。粒子と反対粒子の対発生及び対消滅という・その対性こそが、宇宙と反宇宙の関係を示すものであろう。すなわち、宇宙自体が、対立的な規定性のもとに、発生しかつ消滅しているのであり、世界と反世界によって成り立っているのである。

（1962.9.1脱稿，1963.7.15再稿）